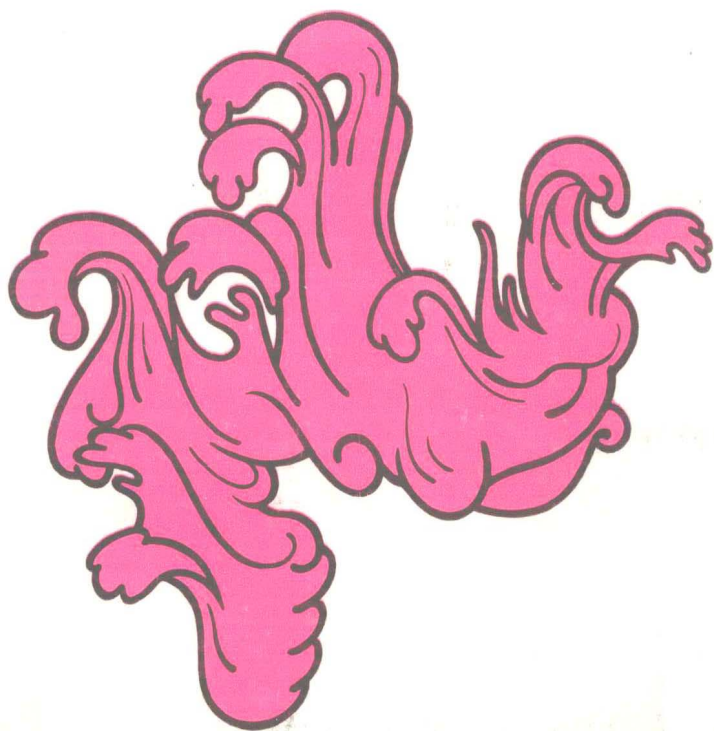


ミッドワ이프の家

三木 卓



ミッドワ이프の家

三木 卓

講談社

ミッドワイフの家

昭和四八年五月二四日 第一刷発行
昭和四八年八月四日 第二刷発行

著者／三木 卓

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一一二

電話 東京(〇三) 九四五―一一一 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所／東洋印刷株式会社

製本所／大製株式会社

定価／六〇〇円



© Taku Miki 1973. 落し本・乱丁本はおとりかえ致します。Printed in Japan

目次

巢のなかで 5

炎に追われて 89

ミッドウイフの家 165

あとがき 240

装帧

横山 明
依岡 昭三

ミッド
ワイフの
家

巢のなかで

泡が揺れながら仄明るい水面にむかって上っていくように目覚めていった。淡青色の闇のなかから身体を抜き出すようにしてそっと目をあけると、部屋には午前中の光が溢れていて、輝く黄金色で物のかたちがいろどられていた。いったいここはどこだろうか。しばらく見当のつかないままにぼんやりとしていたが、置かれている家具や光の具合をじっと眺めているうちに何も驚くことはないということがわかって来た。そうだ。わたしたちは一昨日引越しをしたのだ。そして昨日の月曜日はもう残業だ。印刷所を出たのは今朝の午前三時で、タクシーを拾ったが、肝心の自分の家の位置がはつきりしないのでちょっと心配をしたのだった。

向いの家の硝子戸が開いた。すぐ目と鼻の間で音がした、と思ったほど近かった。人が出て来る気配があり、下駄が砂利を踏んでぎいぎいと鳴った。男だろうか。女だろうか。何をしようとしているのだろうか。ざっ、と水を撒いた。飛沫がわたしの家の羽目板に当るひびきをした。思わず首をちぢめた。だが撒いた当人は、のんびりした声で「命をかあけえた」と小節を利かせてうたった。中年の女だった。「恋じゃあもおの」それからまた、物憂げな投げやりなリズムで下駄

を曳きずるひびきがした。「あははは」彼女は笑った。「こんなところに穴があいちゃったよ」

いったい何のことなのだろうか。わたしはそう思ったが、這い出して行って外の様子をのぞき見しようとはしなかった。蒲団のなかは温く快かった。首をまげて千枝を見た。彼女は微かに口をあいてまだ寝入っていた。室内を眺めた。四畳半と三畳の二間きりしかない長屋の一軒だった。畳は替えられたばかりらしく青味がかっていたが、縁の付いていないもので、しかも安物だった。日の当たらない奥の三畳は湿気を帯びていて薄暗かった。四枚硝子の窓は上二枚が素通しで、下二枚が花模様の硝子だった。その花硝子が、四枚とも模様がちがっていた。

心が沈んでくるのを感じた。二つの部屋の境の鴨居に毛筆の妙な力みの感じられる字で皇紀二千六百十年と書いてあるのをみつめていると、微かにおもしろいような気分もしたが、やりきれなくもあった。こんなところに住むのははじめてだ。たとえばこれは、引越しを手伝ってくれた千枝の年上の友人である勢津子とわたしの二人で見つけたのだが、三畳の部屋にある半間の押入れをあけると、その奥の壁にこれまた癖のある筆の字で「ほんのりと酒の飲みたくなるころのたそがれがたの身のあぢきなさ」と書かれてある。家主も面倒でそこまで消す手間を省いたらしかったが、わたしはその筆づかいに前住者の体温や呼吸を感じる思いがして、しばらくその前に立っていたのだ。

千枝が口のなかで「ゆうちゃん。ゆうちゃん」といいながらわたしの首に腕をまこうとした。

踊る小さな赤い舌が見えた。その小さな頭を押えつけて蒲団のなかに沈めた。彼女はもがくようにしながらわたしの腋の下に首をつっこんで来た。何時ものようにその頭をかかえて支えた。彼女は鼻をこすりつけてわたしの匂いを嗅いだ。その青白い項は折れそうに細かった。髪は漆黒で剛かったが、そのあたりに生えている毛は細い綿毛で茶褐色だった。昔から見慣れた千枝だったのに、今はじめて気づいたような気がした。「ゆうちゃん。ゆうちゃん」今度はか細い声だが、前よりははっきりした声でいった。彼女もまた目覚めかけているのだ。わたしは寝衣の乱れた足がわたしの足のあいだにそっとさし入れられるのを感じた。汗ばんでいて暑かった。彼女はわたしにしっかりとしがみついていた。もぐりこんでいる頭にさわり、髪のかなかに指をつっこんでくしゃくしゃにすると、彼女はわたしの腋の下の弱い肉を、そっと痛くないように噛んだ。

目覚める時、千枝はいつもわたしの名を呼び、そしてこのような仕草に出るのだった。決して幸福を確かめようとしての動作ではない。わたしを信頼していないからなのだ。こんなところまで追いこんでしまった上で、自分を放り出して去っていったまうのではないか。その不安がそうさせるのだ。『あなたのせいよ』何時もそう囁かれているような気がした。千枝は責任をとらせようとしているのだ。

連日の残業や引越しの疲労が肩や背筋にこわばって残っていた。もう起きなくてはいけないだろうか。時計を見た。十時三十分をすこし過ぎていた。室内の温度は上りはじめていた。昨日あ

そこまでやったのだから、今日も昼休みが終る頃までに社へは寄らず直接印刷所へ行けばいいだろう。社長のやつが、業界の景気が上むいているのを狙って年末年始の増刊号を大々的に出す、などということ考えたからこんなことになった。また営業の連中も、文句をいいいいだったがどういうわけかすっかり頑張ってしまった。広告段数が取れば、上の記事はどうやってでもつくらなければならぬ。どんどん増頁だ。それが業界紙というものだ。

千枝の熱い足を挟んだまま肩へ手を廻し抱きよせた。すると千枝の細い指が胸に伸びてきて、わたしの小さな乳首を摘むようにしてさわった。そして今度は掌で押すようにしながら胸から下腹にかけて幾度も撫でた。千枝はわたしの欲望を喚び起そうとしているのだ。そしてこの仕草は、自分の乳房を愛撫してくれということでもあった。わたしは肩へ廻した手で乳首を摘んでもみながらまだ躊躇っていた。昨夜遅くわたしは千枝と交わって、どうしてか彼女を満足させることができなかった。疲れていたせいかもしれない。千枝はそのためにも今、またわたしを求めているのだ。わたしもまた、千枝をこのままにして置きたいとは思わなかった。出掛かったくしやみが引込んだ時の後味の悪さが千枝に残っているだろう。だが、何処かで臆している自分を感じないではいられなかった。

身体が熱くなって来、欲望が目覚めはじめた。千枝の浴衣の下に手を差し入れ、はずみのある大きな臀と背を撫であげた。幾度もそうした。千枝は微かな吐息を洩らして身体を預けた。息は

欲望の匂いを放っていた。わたしは昂奮していたが不安だった。体の調子のいい時は着実な速度で熱くなっていきしかも冷めにくい。今の状態は疲労している時のものだ。感じやすくなりすぎているようだった。わたしは、しっとりとした妻の小柄な肉体をできるだけやさしく愛撫した。

だしぬけに物干竿が地面に落ちる響きがした。右側の窓のすぐ外だった。「あーあ。やっちゃったあ」女の太い声がし、仕方なさそうに笑いで口惜しさをまぎらせて竿を拾い上げる気配がした。「蒲団カバーが泥だらけになっちゃったよ」「いいよ。もう一回洗えば。おたくなんかちゃんとあるんだからね。愛妻号がさ。うちは手動式なんだものね」女たちの無遠慮な話し声が耳もとで鳴った。それに続いて砂利の上を進んで行く乳母車の車輪の軋りが過ぎて行った。「あばあばあばあばよ」女がいつていた。「あばあばあばあばあばよ」

身体がこわばってくるのがわかった。工藤の家の離室は母屋よりもお奥にあり、裏はひろびろとした畑だった。わたしはそこに数年住んでいたの、すっかり住居というものはそういうものだと思いこんでいたのだ。だがもちろんそうではなかった。わたしたちは今、おたがい裸になっただけ抱きあっている。しかし、そこから五メートルと離れていないところに他所の女たちが立っていて、その間には薄い一枚の板しかないのだった。その一枚の板が互を隔てていることによって、どんな恥ずかしいことをすることも許されているのだが、それは理屈でしかない。わたしたちのからだの感覚では、今、衆人環視のなかで抱きあっているのだ。こうして横たわっていて

も、外部の事物はわたしたち夫婦の領域をひっきりなしに侵し続けているのだった。

千枝は顔をあげてわたしを見たが、やはり当惑のためにきつい目つきをしていた。「いやあね」彼女はやっと聞きとれる位の声のない声でいった。「あたし、どうしよう」その声は苛立っていた。「とっても、これじゃ」「平気だよ」わたしは千枝が気分をこわしたので逆に天邪鬼になった。「平気だったら」微笑しながらわたしの好きな漆黒の髪を撫でた。しかし、そういつているわたし自身も落着きを失っているのだった。こんな時には止めておいた方がいいのかもしれない。しかし身体は熱くなっていた。わたしたちにとって一番すばらしい時間だった。これを失いたくはなかった。

わたしたちはしばらく抱きあったまま動かなかった。死んだ真似をしている昆虫のようだった。そうしていればここにいることを気づかれないかもしれない。そんな気持で外の様子をうかがっていた。暫くは何も聞えなかった。どうしようか？ やっぱり止めようか？ 千枝の身体は熱く、わたしはおびえている小動物を抱いているような気持だった。この大事な千枝に触れないで冷えた外気にあたるなどということは考えたくもなかった。外へ行つて何をするというのだ？ 外套を着こんで心も身体も重武装し、それから印刷インクの匂う、埃っぽく薄暗い工場へ出掛けていって、大声をあげてわめきあうのだ。あさましい、脅しと脅されの日常の仕事の大鍋の中だ。それに出掛けて行こう。それはいい。だがその前にわたしはできるだけ優しくなりたかった。

なんの警戒もなしに何をすることも許されている世界でほんのひとときを過したかった。どうせ外は恐怖と怒りと疲労だ。今夜も遅くまで残業になって、痺れたようになった身体を千枝の横にすべりこませることになるのだ。

千枝に入った。二人は何も見えない世界に入りこめるはずだったができなかった。千枝の心はそこになかった。彼女は街を歩いている時の目付きをして、まばたきをした。わたしの背に手をまわしてはいたが、それは習慣にすぎなかった。その目付きは、数メートル外の彼女たちの気配を聞きとるために耳をすませていることを示していた。わたしは早まったのだ。

「ああ逃げちゃうよ。逃げちゃうよ。そんなことをしちゃ」また向いの中年女らしい声が騒ぎだした。「ちゃあんともう一方の手を添えるんだよ。ほんとうにはしっこい鳥なんだから。うちの健一くんなんか幾匹逃がしちゃったか知れやしない」千枝は怯えたような目の色でわたしを見返した。彼女はもういいのかわからないのだ。「ちいちゃん」わたしは出来るだけ小さな声でいった。「とっても可愛いよ。今朝」わたしはそのまぶたに接吻し、首のあたりを唇でこすりあげるようにして落着かせようとした。

しかし、そんなことでどうなるだろうか？ この気持の乗ってこない女をどうしたらいいのだろうか？ わたしは辛抱強く振舞った。掛蒲団を引き上げて頭からかぶってみた。こうすれば外界との間にもう一つ隔壁が作れるということだった。冬至一週間前の黄色い光は、蒲団の隙間か

ら忍びいつて来たが、千枝の表情までは見えなかった。わたしは淡い後悔の気持ちを感じながら「どう」といった。「いいわよ」千枝も囁いたが、その声は日常の会話のようにしつかりとした声音なのだった。

いったい何をしているのだろう？ わたしは馬鹿なんじゃないか？ 千枝だってちょっとひどいじゃないか？ こんなに一生懸命千枝を愛そうとしているのに、いったい千枝はわたしのその気持ちがわからないのだろうか？ それともわかっていて意地悪をしているのだろうか？ わたしは次第にそんな気持ちにとりつかれはじめ、苛々して来た。きっと千枝はわたしに意地悪をしているのだ。もう止めよう、と思った。

ところがその頃になって、微かに応える力が起った。見ると千枝は蒲団から頭半分だけのぞかせていて、瞑っているまぶたを震わせていた。うまく行くかもしれない。わたしは氣をとりなおした。血が目覚め、筋に力がかえってくるのを感じた。欲望の小さな蕾の群が、次々とふくらみはじめ、目の前がかげってくるのがわかった。欲望はためらっているのをやめて疾走しはじめた。だが、その足どりにはやや確実さが欠けていた。やはり昨日と似た、危うさがあった。緊張することがいけない、と知りながらも緊張した。なるべく楽であるように振舞った。しかし今朝のわたしはここまで来る間に相当疲れてしまっているのだ。なんとかなるだろうか。

千枝の口があき、舌が動いていた。「待って、ちいちゃん。待って」わたしは強く囁いたが千